

さくらんぼ産地の再生に向けて



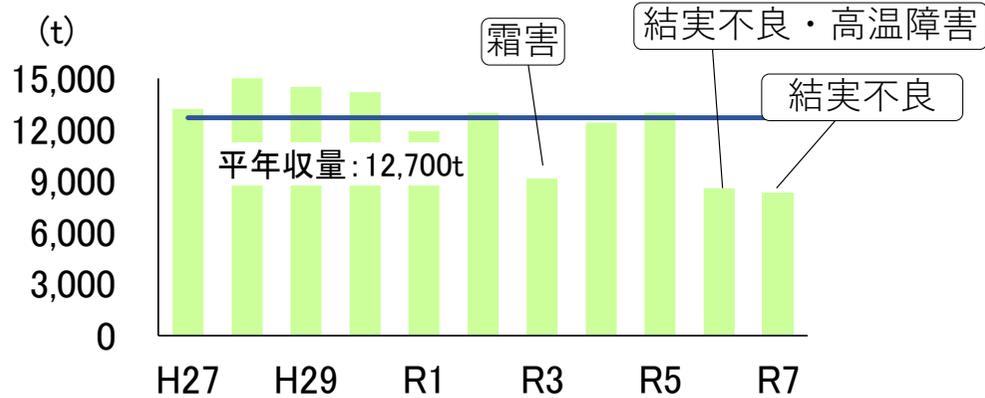
山形県農林水産部園芸大国推進課

さくらんぼ産地の現状と課題



気候変動の影響

＜さくらんぼ収穫量の推移＞



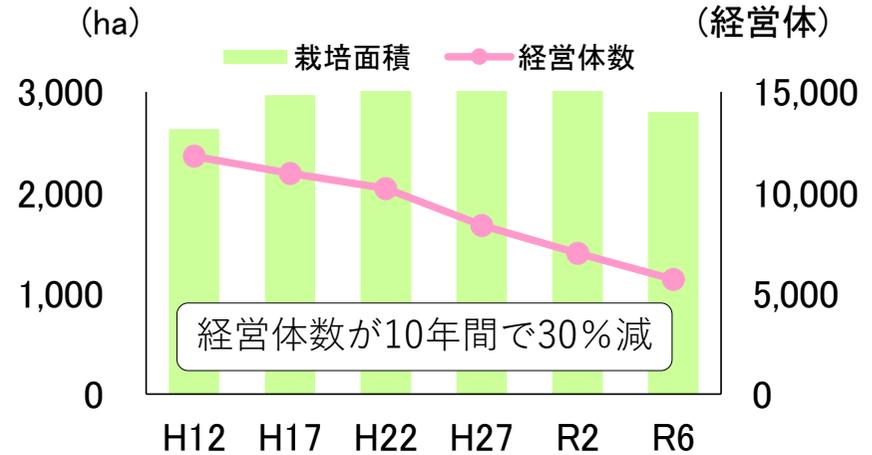
- 極端な気象が頻発し、収穫量・品質が不安定

生産・集出荷コストの高騰

- 資材費や人件費の上昇で、生産コストが高騰（資材費が4年間で20%値上がり）
- 運送業界の規制強化等で、流通コストが高騰

生産者・栽培面積の減少

＜さくらんぼ栽培面積と経営体数の推移＞



- 高齢化の進行と生産者・栽培面積の減少
- 1経営体当たりの栽培面積が増加傾向
- 高齢化に伴い、雇用労力の確保が困難（65歳以上の79%に後継者がいない(令和2年)）

10年後の目標



単収 : 500kg/10a

現状 : 441kg/10a ➡ 目標 : 500kg/10a

- 近年、生産が不安定 = 経営が不安定
⇒ 施設や機械が計画的に更新できない
- 安定的に生産することで、継続的な営農が可能となる

栽培面積 : 2,000ha

現状 : 2,800ha (R6) ➡ 目標 : 2,000ha (R17)

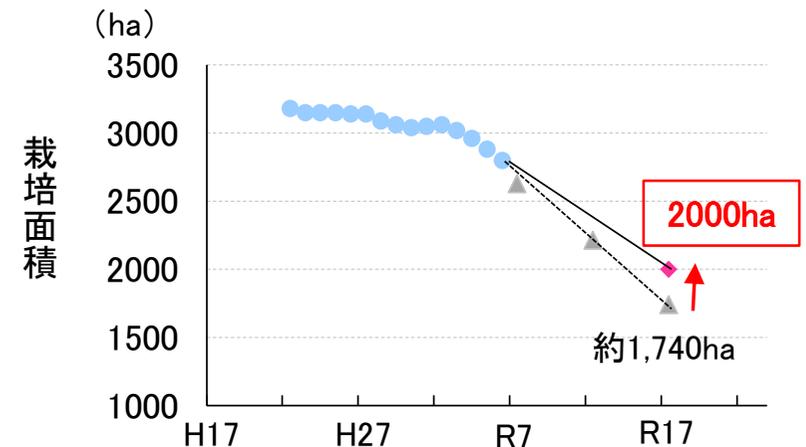
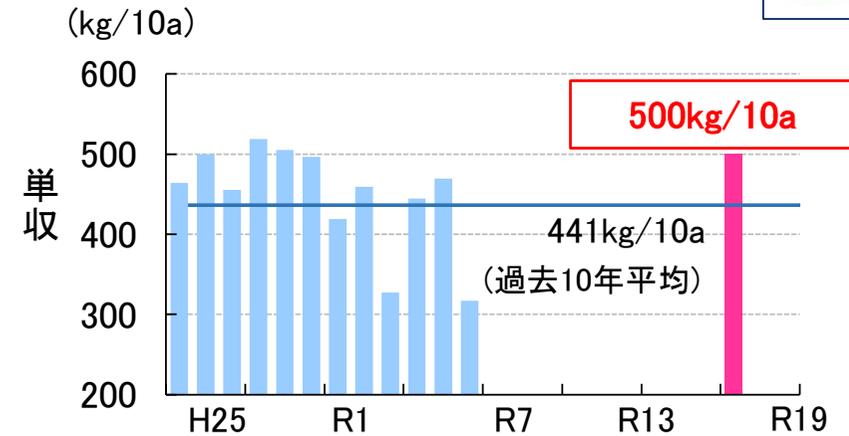
- 担い手の減少などから、毎年約100haの減少が予想される
- 年間の栽培面積減少を70ha程度に抑制 (30%の減少抑制)

担い手の減少緩和

現状 : 5,895経営体 (R6推計) ➡ 目標 : 4,400経営体 (R17)

- 毎年約210経営体の減少が予想される
- 年間の経営体減少数を135程度に抑制 (35%の減少抑制)
- 1経営体当たりの栽培面積を拡大

収穫量 現状 : 11,230 t (過去5か年平均) ➡ 目標 : 10,000 t 維持



産地の維持に向けた具体的な方策



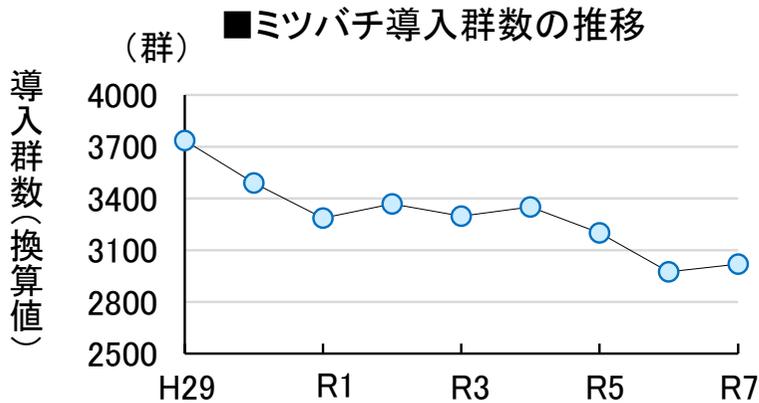
- 1 結実対策：受粉環境の整備
- 2 気候変動対策：高温障害や凍霜害等への対策の実施
- 3 品種転換：生産が不安定な「佐藤錦」偏重からの脱却
- 4 担い手確保：作業効率の向上
雇用労力の確保
園地・技術継承の円滑化
- 5 新たな需要創出：国内外への販路の開拓・拡大
加工品の開発支援と原料果実の安定供給

結実対策の取組み ～受粉環境の整備～



短期的な取組み(2～3年以内)

- マメコバチの減少を補う **ミツバチの導入**
- 園地内への受粉樹の切り枝設置
- 人工受粉の徹底 (自家採取・購入花粉の利用)
- 受粉樹の植栽
- 新型雨よけ施設の開発・普及
(天候に合わせて開閉可能)



**R8の目標：前年の1.5倍を導入
(R7 約3,000群 ⇒ R8 4,500群)**

中・長期期的な取組み(5～10年程度)

- マメコバチの増殖 (短～中期的に取り組む)
- 園地内における受粉樹の混植率向上 (園地の5割程度植栽)
- 受粉樹を必要としない自家和合性品種の開発・普及

■マメコバチ増殖体制のイメージ



気候変動対策の取組み ～高温障害や凍霜害等への対策の実施～

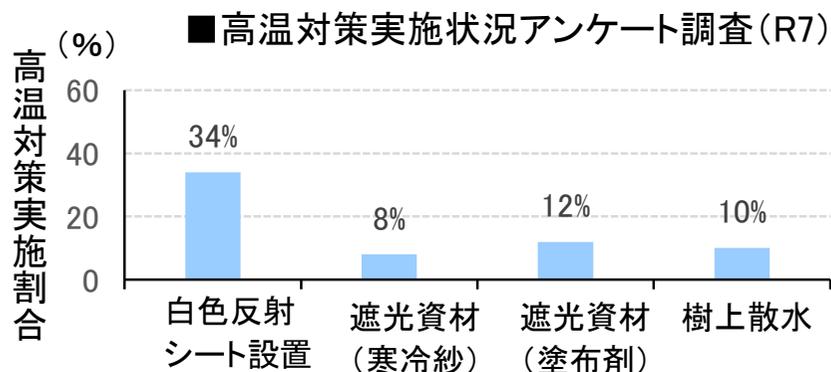


短期的な取組み(2～3年以内)

- 気象に合わせた管理作業の実施
(天候に合わせた着色管理、すぐりもぎの実施など)
- **防霜資材、高温対策資材の利用促進**

防霜資材：樹上散水設備、リターンスタックヒーターなど
高温対策資材：遮光資材、灌水資材など

- **無加温・加温ハウスへの転換**による開花期・収穫期の分散
- 水利の確保 (**井戸掘削など採水場の整備**)



R10の目標：高温対策資材の導入面積割合 50%

中・長期期的な取組み(5～10年程度)

- 複数品種の導入による開花期・収穫期の分散
- 薬剤散布などの簡便な高温対策技術の開発・普及
- ドローン等機械を用いた気象災害対策の委託や共同実施

例) ドローンでの遮光資材散布の委託や共同実施など



品種転換の取組み ～生産が不安定な「佐藤錦」偏重からの脱却～



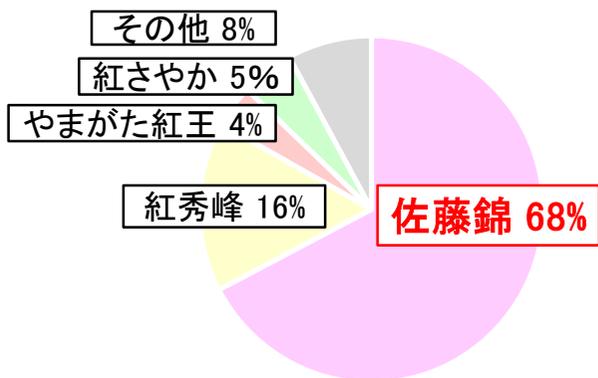
短期的な取組み(2～3年以内)

- 「紅秀峰」「やまがた紅王」の導入拡大と認知度向上
- 生産性の低下した老木の更新
- 収益性の高い受粉用品種の導入

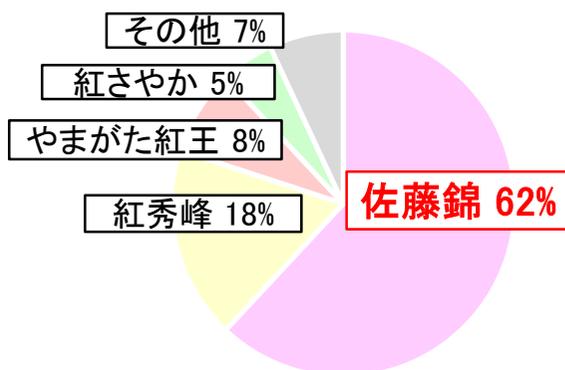
中・長期期的な取組み(5～10年程度)

- 気候変動に対応できる新たな品種の開発

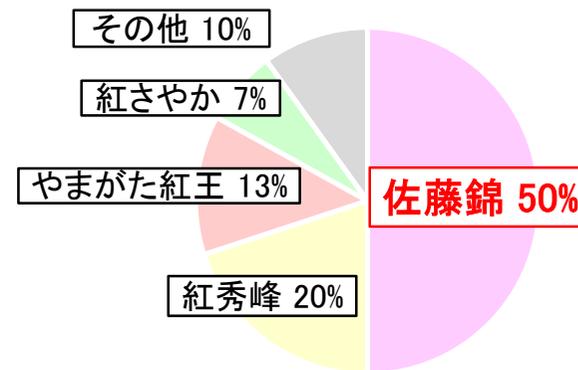
- ・ 高温に強い品種(着色良好、硬肉)
- ・ 安定して結実する品種
- ・ 実割れしにくい品種 など



■現状の品種構成 (R4)



■目標とする品種構成 (R10)



■目標とする品種構成 (R17)

「佐藤錦」以外の品種割合：10年で18%増

担い手確保の取組み ～作業効率向上、労力確保、園地・技術継承の円滑化～



短期的な取組み(2～3年以内)

- 雨よけ施設や農業機械の更新・スマート農業技術の導入（草刈りロボット、低温・高温アラート、AI選果機など）
- トレーニングファームの整備
- 離農予定樹園地情報のホームページ（樹園地データベース）の活用による園地継承の円滑化
- 1日農業バイトアプリ、外国人材、関係人口の活用などによる雇用労力の確保
- 建設業者等の民間事業者の参入推進（新たな大規模経営体の確保）
- 省力・軽労的な仕立て方（Y字、V字、平棚仕立て）の大規模経営体を中心とした段階的な導入

中・長期期的な取組み（5～10年程度）

- 園地の集積・集約や生産性の高い団地形成の推進
- サービス事業者の参入推進（管理作業の委託）
- 収穫ロボットや自動防除ロボットの導入
- 集出荷体制の見直し

(生産者) 収穫



無選別のままコンテナで持ち込み

(農協等) 集荷、選果・箱詰め、出荷

■園地集積・団地化の将来像



新たな需要創出の取組み



◆ 国内外への販路の開拓・拡大

- 輸出支援機関と連携した販路の開拓、拡大
- 民間企業と連携したさくらんぼ鮮度保持技術の開発・実証

◆ 加工品の開発支援と原料果実の安定供給

- 新商品の開発支援と加工品コンテストの開催
- 原料果実の安定供給（規格外品を含めた収穫促進）
- 新たな加工技術の開発（さくらんぼの冷凍保存技術など）
- 食品製造業者を対象とした加工技術研修会の開催（セミドライさくらんぼの製造方法など）



さくらんぼラガー



クラフトコーラ



「佐藤錦」グミ



さくらんぼラスク



さくらんぼパスタ

結実対策

気候変動対策

品種転換

担い手確保

新たな需要創出

さくらんぼ産地の再生・維持
50年後を見据えたさくらんぼ産地づくり